

Buddhist ruins exploration record at silk road シルクロード仏教遺跡探訪記

14日目【2000年4月27日午前】

全37日間

この地で憧れの高僧に出会う〈武威〉前半

今日の旅は長く感じた。蘭州駅を22時発、翌朝7時に武威駅着。確かに9時間弱の長旅である。だがそれ以上に長く感じた。十分眠れなかったのである。

旅行ガイドブックに、蘭州から一路北北西へ、海拔2700メートルの烏鞘嶺を超えて河西回廊に入り、ここ武威に至ると書かれていた。ある程度の寒さは予想していたが、思った以上であった。

寝台車両の四人用個室に、私の横には60歳くらいの年配者。何故か日本語で私の顔を見ては「にっぽん、にっぽん」と何回も嬉しそうに言ってきた。早く眠りにつきたかったのだが、私の持っていたガイドブックと会話集を取り上げて、楽しそうに見ていたので、返して欲しいと言えなかった。

私の上には、齒軋りのひとり女性。斜め上には、おそらく40歳くらいだろうか、ビジネスマンらしく洒落たスーツを着ており、寝る前にそれらを全部脱いで、カバンからパジャマを出し、着替えていた。



武威駅に到着



武威の街並み



武威のホテル

住職レター

お彼岸を迎えました。善教寺墓苑のお供え物が、いつもより賑やかで、仏花もたくさん供えられています。お墓へお参りされ、ご先祖の皆さまと、お会いになられたことでしょうか。

仏教で彼岸とは「悟りの世界」であり、浄土となる「あの世」を指します。対して、この世（現世）は「此岸（しがん）」と呼ばれます。お彼岸は、太陽が真東から昇り真西へと沈むことから、浄土である彼岸と現世の此岸が最も近くなる時期だと考えられています。

そのため一般的に、「お彼岸には先祖や故人の霊がこの世に還ってくる」と言われるのでしょうか。

しかし浄土真宗には霊という概念はなく、故人や先祖の霊がこの世に還ってくることはありません。追善供養を行う必要もないとされています。

浄土真宗にとってのお彼岸は、阿弥陀様に感謝し、自分も浄土へいけるよう阿弥陀様の教えをしつかり聞くためのものです。またお墓参りは、仏様に感謝の気持ちを伝えるため

のものとされています。

子どもの頃、境内で遊んでいると、祖母はいつも、夕方になると境内に出てきて、沈みゆく太陽を拝んでました。浄土に思いを馳せ、ご先祖様を偲び、感謝を伝えていたのでしょうか。

お彼岸の夕日が美しく感じられるのは、阿弥陀様の教えと願いが注がれているからでしょうね。



Buddhist ruins exploration record at silk road
シルクロード仏教遺跡探訪記

14日目【2000年4月27日午前】

全37日間

この地で憧れの高僧に出会う〈武威〉後半



朝から屋台で餃子を食べる

様々な人がいると思いつつ、隣の人から大事なガイドブックと会話集を返してもらい、ようやく寝付けると思ったら、とんでもない。斜め上の男性のイビキの凄いこと。「グー、グー」なんてもんじゃなく、「ガーゴオー・グワーゴー」と、今までに聞いた事がない騒音であった。また上の女性の歯軋り、これもハーモニーを奏でると言えば聞こえはいいのだが、「まーあんた、いくらストレスが溜まってるからって、そこまで

歯を食い縛らんでもー」と、腹立たしさを乗り越えて呆れる思いであった。

それから隣の年配者。おとなしく寝てるのかと思ったら、ブーツとおならである。五分に一回くらいは、おならをしていた。

それから、何度トイレに行ったことやら。この寒さで、持っていたブルズンを着て、支給された毛布を二枚掛けて、それでもまだ寒い。

この鉄道での移動は生涯忘れないでしょう。



武威の屋台で朝食

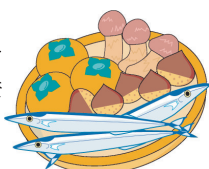
講師 吉盛大智師（黒瀬町西教寺）
*お接待当番 武士地区

午後三時半 法要終了

午後一時半 昼席

午前十時 朝席

「報恩講」（善教寺本堂）
十二月二日（火曜日）



講師 広幡康祐師（呉市安浦町信楽寺）
午後三時半 法要終了

午後一時半 昼席

午前十時 朝席

「護持会報恩講」（善教寺本堂）
十月十八日（土曜日）

*毎月十六日に本堂において勤めております。

午後一時半

「宗祖聖人月忌・
門信徒祥月命日法要」（善教寺本堂）
十月十六日（木曜日）

今後の法要スケジュール

ご縁に感謝

善教寺ホームページ『縁』 <http://otera.or.jp/>

メール zenkyo@otera.or.jp